保育実践者として論文を書く

帝京大学(元　あんず幼稚園)
利根川　彰博

日々の保育実践

おもしろい！

不思議！

保育実践者として

なぜ？

こんな意味があった？

あれとつながる！

実践記録

日々の保育の中から立ち上がる
「なぜだろう？」を
カタチにしたい。

実践者仲間との
小さな研究会

- 自分の実践の中でゴチャゴチャ・モヤモヤしているものを資料(文字)化し、整理されてくる過程で気づく、おもしろさ。
- 自分の実践・興味について、参加者が意見を出し合い討議してくれるおもしろさ。
- 伝えたいことが伝わらない、もどかしさ。悔しさ。
- 視野の広がり。

現場の研究会と学問的研究は別物。

- 2007年前後
- 質的研究の機運が高まる。
- 「現場と学問の交わるところ」
- 白梅学園大学大学院設立

別物 → つながる！

では、何を研究するのか？

- 幼稚園4歳児クラス
- **11月頃、自由な活動場面での子ども同士のかかわり方に変化が感じられる**(いざこざ場面での第三者の仲裁など）。
- それはなぜか？　知りたい。
- 断片的な事例は数々ある。
- 先行研究や文献にあたる。・・個の発達
- 手持ちのものだけでは、はっきりしない。
- 自分がやるしかない！

研究の方法

- 対象児：月齢が高くない・兄弟姉妹がいない・2年保育（新入園児）
- 1年間追っていく。
- 保育中、すべての場面を対象に、ボイスレコーダー・メモ・ビデオ等を使って記録。
- その日の記録はその日のうちに文字化。
- 2週間～1カ月ごとにまとめて資料化。

基礎データをどうする？

- 1年間のデータ。その都度の考察。

クラス担任として

- ここまでの時点でも、気づいたことはたくさんある。
- 担任する子どもたちが変わる。
- 目を向けるところを変えたくなる。

新たなステージ

- 生身の子どもたちと離れ、データと向き合う。
  ミッション
- 「一年を幾つかの期に分けていく」
- ひとつのエピソードから、いろいろなことが言える。読み取れることがたくさんある。
- 微妙なやり取り。文脈から切り離せない意味。
- 検討を重ねるごとに見つかる発見。
- おもしろいけど、まとまらない。

広がる問い・・・
最短距離は進めない

- 保育者のかかわりの影響
- 会話分析：保育者の発話の一つひとつを切り出して、考察する。
- クラス規範の創出の検証

- 大きすぎる問いでも、とにかく一つひとつをカタチにすること。
- 「実践知」を分ってくれない他者との対話が必要。

どんな視点で分析するのか？

- 先行研究文献の中から

「人間関係において育つものが相当多次元」であり、幼児期において「ひとつの筋で3年間の発達性が成り立っているわけではなくて、かなり幾つかの筋に分かれていく」

「3つの発達ライン」仮説

- 自由選択的関係ライン
- 仲良し関係ライン
- 集団の一員としての関係ライン

めでたし　めでたし。

「投稿論文を書けるよね」

- その発見・結論が、保育界にとって新しい知見であること。
- 「学会へのお手紙だから」

- 問いと結論を小さくひとつに絞ること。
- 更なるデータの切り分け。視点の切り替え。
- どういう文脈で語るのか？(先行研究の流れに位置付ける)

投稿する

- 採択
- おめでとう！

- 不採択
- 査読の先生との対話
- 自分の書いたものと更なる対話
- よりよいものにしていける。